

青年期女子のアイデンティティ確立及び母親への愛着が異性態度に及ぼす影響

岩木友里

I 問題・目的

1. 青年期とアイデンティティ 自我同一性（アイデンティティ）はErikson（1950/1977）の発達理論で提唱された概念である。Erikson（1950/1977）は、ライフサイクルに基づき、人間を乳児期から老年期までの8つの段階に分けている。そこで人はそれぞれの段階で心理・社会的危機にさらされ、そこで獲得すべき発達主題があると述べている。その中で重要であると強調されているのが第V段階の青年期におとずれる「自我同一性 対 自我同一性の拡散」の危機である。

Eriksonの同一性の概念をより具体的にとらえようと、Marcia（1966/1990）は経験する危機のプロセスを類型化した同一性地位（アイデンティティ・ステイタス）という考え方を提唱している。それは、個人の同一性を、自分自身の職業、価値などについて思い悩み、真剣に考えた時期があったか、選択の結果に納得できているかの危機と、決定された自分のあり方・進路について自分自身の問題として取り組んでいる、またはどれほど本気であるかの積極的関与によって [同一性達成]、[フォークロージャー]、[モラトリアム]、[拡散]の4つのステイタスに分類する。

2. 恋愛とアイデンティティ 青年期の時期に不安定な同一性を異性・恋人からの評価によって補強しようとする恋愛行動を“アイデンティティのための恋愛”（大野，1995）と呼ぶ。

“アイデンティティのための恋愛”の特徴（大野，1995）として、①相手からの賛美、賞賛を求めたい、②相手からの評価が気になる、③相手の挙動に目が離せなくなる、④しばらくすると、呑み込まれる不安を感じる、⑤交際が長続きしない、という5つがある。これらの特徴から、同一性が不安定な者ほど恋愛関係でネガティブな影響を受けることが示唆される。

3. 母と青年期の娘 同一性の他に親との愛着関係が恋愛に関係している（有泉，2006）。愛着とは、人が特定の他人に対して形成する情緒的な絆のことであり、人は乳児期から、愛着の対象（多くは母親）との相互作用によって、自己およ

び他者に対する信頼や期待のイメージである内的作業モデルを形成する（Bowlby，1969/1976）。内的作業モデルは青年期・成人期に受け継がれ、恋人や配偶者といった対人関係に大きな影響を与える（Hazan&Shaver，1987/2006）。

親子関係の中でも、母娘は情緒的結びつきが強いことが指摘されている（柏木・永久，1999）。女子大学生を対象に周囲の親しい人との愛着が、対人不安にどのような影響を与えるか調べた研究（森下・三原，2015）では、「母親への愛着」の高さは「自己受容」を高めると共に、「異性不安」を高めていた。また、青年期の男女の異性不安と異性対人行動の関連を調べた富重（2000）は、異性不安は異性に対する積極的な行動・日常相互作用を含めた異性行動全般を抑制することを示唆した。同一性の確立が恋愛に及ぼす影響と、先行研究から、母親への愛着の高さは異性不安を呼び起こすが、逆に安定した愛着を母親と築いていると、異性に対し、異性不安を起しにくいと考えられる。

本研究は、母と青年期女子の愛着関係と同一性確立の程度の2要因を同時に取り上げ、それらが異性への態度にどのような影響を及ぼすかについて異性への不安及び異性に対する行動を指標として調査を行う。

II 方法

分析対象者 調査時期は2017年11月、大学・専門学校に通う女子学生222名（平均年齢：19.80歳）を対象とした。

調査内容 (1) 1因子構造である母親に対する「愛着尺度」（森下・三原，2015）、(2) <安定した内的作業モデル>と<不安定な内的作業モデル>で構成される「内的作業モデル尺度」（森下・三原，2015）、(3) Marcia（1966/1990）の同一性地位の概念を踏まえて、<過去の危機>、<現在の自己投入>、<将来の自己投入の希求>という3尺度得点の組み合わせによって6つの地位に同一性を分類する「同一性地位判定尺度」（加藤，1983）、(4) 1因子構造である「異性不安尺度」（富重，1994）、(5) 「異性対人行動尺度」（富重，

2010) を使用した。分析の結果、「異性対人行動尺度」についてのみ先行研究と異なる因子となり、<特定の異性に対する行動>、<異性の友人に対する行動>、<不特定の異性に対する積極的行動>で構成された。

Ⅲ 結果・考察

分析の結果、「異性対人行動尺度」についてのみ先行研究と異なる因子となり、<特定の異性に対する行動>、<異性の友人に対する行動>、<不特定の異性に対する積極的行動>で構成された。

本研究では母親に対する愛着の高さや同一性地位と異性態度との関連を想定して研究を行った。分析の結果、それら2変数が単独で異性態度と関連するというよりは、愛着の高さや同一性地位と関連の深い内的作業モデルやそれら3変数の相互作用が異性不安や異性対人行動と関連していることが考えられた(表1)。これは、母親への愛着の高さと異性不安との関連を指摘した先行研究とは異なる結果であった。しかし、3つの変数を同時にとりあげて群分けし、その群ごとの異性態度の差を比較した本研究の結果(表2)からは、それら3つの相互作用、とりわけ同一性地位が異性態度と関連していることが示唆された。

異性対人行動においては、安定した内的作業モデルを形成している人ほど、積極的な異性対人行動をとりやすいことが明らかになった。また、同一性形成のために積極的自己投入を行なっている人は、特定の異性への行動や不特定の異性に対する積極的行動をとっていることや、過去の危機を体験している人が不特定の異性への積極的行動をとっていることなどから、“アイデンティティのための恋愛”の示唆があった。

本研究においては、異性態度と関連する項目として想定した母親への愛着、内定作業モデル、同一性地位の3変数間の関連性について十分な関係性が明らかではないまま、探索的に分析を行った。また分析方法も限られた方法のみを行うにとどまった。そのため、それらの変数がどのように、何を媒介として異性態度に影響を与えたのか十分に明らかにできなかったところがある。

今後は恋人の有無や母親と同居、非同居などの現在の状態などの変数も含めた上で、今回行った分析方法のみならず、多変数間の相関関係をふまえた分析を行うことで、青年期女子における異性への態度に影響を与えるものは何なのか、包括的

に検討していきたい。

【表1】各変数間の相関係数 ** $p<.01$, * $P<.05$

	内的作業モデル		アイデンティティ・ステータス			異性対人行動				
	母親に対する愛着	不安定な内的作業モデル	安定した内的作業モデル	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希望	異性不安	特定の異性への行動	異性の友人への行動	不特定の異性への積極的行動
母親への愛着	—	-.239**	.265**	.306**	-.137*	.285**	-.0.106	-0.029	0.003	0.024
内的作業モデル	不安定な内的作業モデル	—	-.414**	-.348**	.360**	-.0.114	.382**	-.0.112	-.148*	-.193*
	安定した内的作業モデル		—	.361**	-.166*	.297**	-.420**	.197**	.198**	.246**
アイデンティティ・ステータス	現在の自己投入			—	0.006	.428**	-.372**	.140*	0.106	.162*
	過去の危機				—	.302**	0.132	-.0.058	-.0.013	-.0.047
異性対人行動	将来の自己投入の希望					—	-.0.118	-.0.025	0.077	0.094
	異性不安						—	-.421**	-.358**	-.447**
異性対人行動	特定の異性への行動							—	.603**	.555**
	異性の友人への行動								—	.608**
	不特定の異性への積極的行動									—

【表2】異性不安と異性対人行動における1要因分散分析と多重比較 ** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$

	1. 愛着が高く、不安定な内的作業モデル群 (n=77)				2. フォークロージャー群 (n=66)				3. 拡散群 (n=22)				4. 過去の危機が高い群 (n=57)				F値	多重比較				
	平均(SD)				平均(SD)				平均(SD)				平均(SD)									
異性不安	33.84(7.94)				27.77(7.40)				39.59(7.64)				28.54(6.63)				19.696**	3>1>4, 2**				
異性対人行動	特定の異性への行動				8.07(4.27)				9.20(6.12)				8.14(4.68)				9.72(4.96)				1.617	n. s.
	異性の友人への行動				9.86(4.51)				10.32(4.57)				9.14(4.50)				10.95(4.39)				1.075	n. s.
	不特定の異性への積極的行動				8.40(3.44)				9.50(4.39)				7.46(3.35)				9.84(4.35)				2.888*	4>3*

Ⅳ 引用文献

有泉優里(2006):第1部3アタッチメント理論から恋愛を考える
 斉藤勇(2006):イラストレート恋愛心理学—出会いから親密な関係へ
 Bowlby, J.(1969):*Attachment and loss: Vol.1 Attachment*. Hogarth Press. 黒田実郎・大羽泰・岡田洋子・黒田聖一訳(1976):母子関係の理論I-愛着行動-岩波学術出版
 Erikson, E. H.(1950):*Childhood and Society*. Norton. 仁科弥生訳(1977)幼児期と社会、みすず書房
 Hazan, C.&Shaver, P.(1987).Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52,511-524. 有泉優子(2006):第1部3アタッチメント理論から恋愛を考える
 柏木恵子・永久ひさ子(1999), 女性における子どもの価値:今、なぜ子を産むのか 教育心理学研究47(2)170-179.
 加藤厚(1983):自我同一性の形成、堀洋道監・山本真理子編:心理測定尺度集I-人間の内面を探る(自己・個人内過程)-サイエンス社, Marcia, J.E.(1966):Development and Validation of Ego-identity Status, *Journal of Personality and Social Psychology*, 3(5), 551-558
 鎌幹八郎(1990):アイデンティティの心理学 講談社
 森下正康・三原まどか(2015):親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響:内的作業モデルと自己受容を媒介として、京都女子大学大学院発達教育学
 研究科博士後課程研究紀要, 9, pp.31-42.
 大野久(1995):青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見孝編 講座生涯発達心理学4巻 自己への問い直し:青年期(第4章), 金子書房
 富重健一(1994):異性不安尺度 吉田富二雄(編) 心理測定尺度集II-人間と社会のつながりをとらえる(対人関係・価値観)-サイエンス社
 富重健一(2000):青年期における異性不安と異性対人行動の関係—異性に対する親和指向に関する他者比較・継時的比較の役割を中心に—社会心理学研究, 15(3),